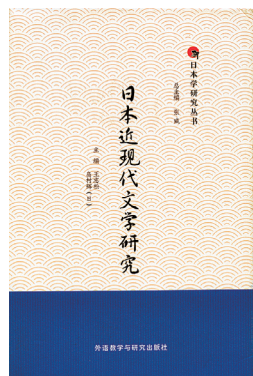


王志松・島村輝主編

# 『日本近現代文学研究』

王志松・島村輝主編『日本近現代文学研究』（張威主編「日本学研究丛书」）  
北京・外语教学与研究出版社、二〇一四年

大東和重



一見、書名のみだと、日本近現代文学研究の雑誌、もしくは論文集のようだが、本書は「研究案内」と称すべき一冊である。中国での出版だが、中国語の論文タイトルを除き、すべて日本語で書かれている。読者対象は中国の日本文学研究者や学生、及び流通は限られるだろうが、日本在住の研究者・学生を想定すると思われる。

第一編「総論」では、編者の島村輝氏による、一九七〇年代以降の研究史、「理論的到達点と課題」につづき、中国・韓国・ヨーロッパにおける研究の現状が、各地域の研究者により紹介される。第二編「作家研究」は本書の中枢をなし、坪内逍遙（執筆者は潘文東、以下敬称略）から藤沢周平（高橋敏夫）まで、計七十名の著名

作家についての研究案内が記されている。第三編「方法と視角」では、読者論・ジェンダー批評・ジャーナリズム・大衆文学・マンガ・中日比較文学など、十二のテーマについて記される。巻末に付録として、年表や参考文献・索引を収めた、六〇〇頁を超える大冊である。項目・執筆者数が多いので、順を追っての論評は避け、本書刊行の意味や書評者が気になった点について記させていただきたい。

日本近現代文学の研究案内は、かつては数年に一冊は出ていたものだ。書評者が手元に置いてよく見るものだけでも、

『現代文学研究 情報と資料』（至文堂、一九八六年）

『明治大正昭和 作家研究大事典』（作家研究大事典編纂会編、桜楓社、一九九二年）

『日本文学研究の現状Ⅱ 近代』（有精堂編集部編、有精堂、一九九二年）

『別冊國文學 新・現代文学研究必携』（竹盛天雄ほか編、學燈社、一九九二年十一月）

の四冊がある。日本近現代文学の研究案内の専著として最も早いのは、岡野他家夫『明治文学研究誌』（東京武蔵野書院、一九三八年）あたりかと思うが、古くなつたが現在でも参照価値のある案内に、『近代文学研究必携 増補版』（近代文学懇談会編、學燈社、一九六三年）、『近代文学』全十卷（三好行雄・竹盛天雄編、有斐閣、一九七七年）、『日本近代文学研究必携』（三好行雄編、學燈社、一九七七年）、『別冊國文學 日本現代文学研究必携』（三好行雄編、學燈社、一九八三年七月）などがある。これら研究案内は、主要作家について、著作目録や研究文献目録の所在、近親者の回想や伝記などの必読文献、重要な先行研究や研究の現状を知る上で非常に有用である。

単行本・雑誌の別冊以外にも、『日本文学研究資料叢書』（日本文学研究資料刊行会編、有精堂、一九六九～八六年）などの論文集成に付された「解説」も、収録論文の解説中心ながら同様の働きを

持つ。作家ごとでなく、『近代小説研究必携』全三卷（有精堂編集部編、有精堂、一九八八年）や『解釈と鑑賞』「特集 明治長編小説事典」（至文堂、一九九二年四月）のように、作品ごとの研究案内もある。あるいは、『別冊國文學』（學燈社）の「必携」シリーズや、同じく『國文學』の特集「〇〇を読むための研究事典」、『解釈と鑑賞』（至文堂）の特集「〇〇研究のために」も、対象はごく一部のメジャー作家に限定されるが、研究案内として充実していた。

もちろん研究を進める上で、研究案内を鵜呑みにすることはできないし、そもそも掲載された作家の数は、最大の『明治大正昭和 作家研究大事典』でも二六〇名にすぎない。それ以外については、深井人詩編『人物書誌索引』（日外アソシエーツ）などを用いて、年譜や著作目録を探すが、先行研究など存在しないケースもあり、結局は総目次など他の参考図書の助けも借りつつ、地道に一次資料に当たっていくしかない。それにしても、主要作家についてだけでも研究案内があれば、大変助かることは間違いない。

しかしこの二十年ほど、網羅的な研究案内が出ることはめづきり減った。書評者の主観的な推測にすぎないが、背景には、日本文学の専攻が減少するとともに、日本文学で卒業論文を書く学生が八〇年代に比べ減ったこと、対して九〇年代から大学院生の数は増えたものの、研究が細分化されたことで、日本近現代文学全体を網羅するような研究案内に対する需要が低下したこと、結果

として、研究者や出版社がこの種の企画に積極的でなくなつたことなどが挙げられるかと考えている。歴史学では今でも研究案内が間を置かず刊行されているのを見ると、未開拓分野の研究に積極的で、先行研究との関係や学界における位置づけが強く求められる歴史学に対し、文学研究では論文執筆者の着眼点やオリジナリティが重んじられ、先行研究の整理が重視されない点も関わるのかもしれない。しかし九〇年代前半までは、文学でも研究案内が盛んに出ていたわけで、現在では雑誌『昭和文学研究』の「研究動向」欄が貴重な情報源となつている。

日本ではなかなか出なくなつた研究案内が、中国で刊行される背景には、当然ながら中国における日本語学習・日本文学研究の盛行がある。国際交流基金のホームページによれば（二〇一五年三月二十日アクセス）、中国の二〇一二年度の日本語学習者数は百万人を超え、うち高等教育機関での学習者が六十五パーセントを占める。「文学」の社会的地位が日本に比べ現在でも高い中国のことだから（日本同様徐々に下落しつつあるが）、日本近現代文学を読み、研究する学生が、千を超える単位で存在すると予想される。本書を含む「日本文学研究叢書」は計十六冊で構成され、文法や日本語教育などと並び、古代文学・歴史・社会・思想・文化などの巻が並ぶ。そのうち一冊に、研究案内が当てられるだけの需要が、日本近現代文学にはある、ということである。

中国における日本研究にはすでに相当な蓄積がある。現状については、李玉「中国の日本研究 回顧と展望」（坂部晶子訳、王敏編『中国人の日本観 相互理解のための思索と実践 国際日本学とは何か?』三和書籍、二〇〇九年）などをご参照いただくととして、一九七〇年代末の改革開放以来、約三十五年を経て、日本近現代文学研究について大部の研究案内が刊行される段階に達したということを喜ぶたい。ましてや、日本で研究案内が少なくなつた今日、中国での本書の刊行は、手放しで言祝ぎたくなる。

とはいえ、本書の個々の作家研究案内を見ると、ないものねだりしたくなる。各項目の執筆者は、中日両国の出身者を中心とした、日本近現代文学研究者だが、中国側の研究者が記す場合、多くは中日比較文学に記述が割かれる一方で、日本側の研究者の場合、中国とは無関係であることが多い。本書が日本で刊行されたのなら無関係でよからうが、日本語の書籍といつてもせつかく中国で刊行されるのだから、当該作家の中国と関わる側面についての記述を求めるのは、人情というものだろう。

具体例を挙げると、高橋修「二葉亭四迷」は、近年の『浮雲』研究を丁寧にトレースし、教えられるところ多いが、二葉亭と中国の関係についての言及は一切ない。二葉亭はしばしば魯迅などと対比して中日比較文学の対象となるが、それらの論文が二葉亭研究に必ずしも寄与しないことは書評者にもわかる。しかし大陸

雄飛を宿願とした二葉亭は、約一年間もハルビン及び北京に滞在、京師警務学堂に務めた経歴、つまり中国のお雇い外国人だった経験がある。当然ながら伝記的著作では相当な紙幅が割かれる（中村光夫『二葉亭四迷伝』講談社、一九五八年、桶谷秀昭『二葉亭四迷と明治日本』文藝春秋、一九八六年、関川夏央『二葉亭四迷の明治四十一年』文藝春秋、一九九六年など）。せつかく中国で出る本なのだから、北京等滞在に関する研究を促す一言があってもいいのではないだろうか。

中国側の筆者になる項目では、張沖「谷崎潤一郎」や単援朝「芥川龍之介」のように、中国における研究への言及が充分になされているものがあり、研究が少ない場合でも、孫艶華「泉鏡花」は簡潔に研究史を紹介、現状にも触れた上で、中国における研究の少なさを嘆き、中国文学との比較研究を促して、意図の鮮明な案内となっている。その一方で、先行研究の羅列にとどまり、玉石混交、案内となりえていないケースも散見される。陳多友「森鷗外」は、末尾で中国における研究に触れているものの、論文や書籍の羅列がつづく。鷗外は中国との関わりでいえば日清戦争従軍経験があるし、漢詩人としての側面についていえば、小島憲之『ことばの重み——鷗外の謎を解く漢語』（新潮選書、一九八四年）や古田島洋介が注釈を施した『鷗外歴史文学集』第十二・十三巻（漢詩上・下、岩波書店、二〇〇〇・二〇〇一年）は必ず挙げられる

べき業績である。

ないもののねだりはきりがなが、頁を繰りながら、鄭文全「正岡子規」では葛祖蘭にもつと触れてほしい、前田貞昭「井伏鱒二」ではなぜシンガポール滞在に触れてくれないのだろうか、といった気持ちかわいてくる。そもそも立項の時点で、たとえば日本における名声が劣つても、中国滞在経験（出征を含む）のある文学者、金子光晴・火野葦平・田村泰次郎・堀田善衛・中蘭英助らを項目にする選択肢はなかったのかとも思われる。あるいは中国人留学生と深い交流のあった秋田雨雀、中国で知名度高く広く読まれた厨川白村や江馬修でもいい。これは第三編「方法と視角」についても同じで、近年日中戦争下の戦争文学について研究が進んでいるだけに、項目のないのが残念である（本書を収めた叢書の一冊に、李均洋・佐藤利行編『中日比較文学研究』があるが、こちらは古典文学研究を中心とした論文集である。序章の概説を除けば、中日比較文学の入門書ではない）。

とはいえ書評者は、研究案内はいくら多くあつてもいい、と考えている。かつて、中国の研究書の日本語訳について、書評を記したことがあるが、日本の研究水準が充分生かされてないことを残念に思った。本書は何といつても中国で出版された本であり、中国の日本近現代文学研究が日本の研究に伍して貢献する上で、資するところ大であることを確信する。